

中公文庫40年

メディアをにぎわせた名著

40th



2013年秋号
中央公論新社

40th
中公文庫

中公文庫創刊四〇周年のご挨拶

中公文庫は二〇一三年、創刊四〇周年を迎えます。

一九七三年六月、谷崎潤一郎『潤一郎訳 源氏物語』巻一、司馬遼太郎『豊臣家の人々』、安部公房『榎本武揚』、庄司薫『赤頭巾ちゃん気をつけて』、小川環樹訳注『老子』、ニーチェ著、手塚富雄訳『ツアラトウストラ』など十作品のラインナップで創刊しました。

創刊時の遠藤周作氏の推薦文に「若い人たちにともすれば読みづらかった東西の古典を、みずみずしい新訳で出すこと」とあるように、古典を新たな形で届け、またその時代を代表する作家の作品を続々と刊行して参りました。

これからも新たな試みにチャレンジしつつも、不変の価値を追い求める、魅力あふれる文庫への成長を目指し、編集部一同、努力して参りたいと存じます。

目次

こ 挨拶

青春小説の系譜「青春」は特別じゃない

——『赤頭巾ちゃん気をつけて』『TUGUMI』 橋本治 2

歴史と人間の物語 問いかける人間の悲劇性——『高橋是清自伝』他 三浦雅士

文豪の時代 谷崎潤一郎と中公文庫——『青春物語』他 小谷野敦 18

日本人論の系譜 岡崎武志 26

中公オリジナル・エンターテインメント 香山二三郎 30

時代・歴史小説の傑作 末國善己 34

〈囲みコラム／文責・編集部〉三島由紀夫の庄司薫評 7／ベストセラーを生んだアイドルの一言 8／ベストセラーが生んだ慣用句 16／歴史全集の世界 17／戦時中の言論統制と中央公論 23／細君讓渡事件 25／週刊誌の“日本人論” 29／中公文庫創刊のころ——第三

次文庫ブーム 38

「青春」は特別じゃない

——『赤頭巾ちゃん気をつけて』『TUGUMI』

「中公文庫の中の青春小説について語ってほしい」と言われて、瞬間私は「そんなのあるの?」と言ってしまった。中公文庫と青春小説というのは、なんとなく無縁のような感じがしていたので。

しかし、そんなことを言ったらすぐに、「ありますよ」の答が編集者氏から返って来た。「庄司薫氏の『赤頭巾ちゃん気をつけて』の四部作や、吉本ばなな氏の『TUGUMI』とか」と。言われて「そうか——」と、その二つの作品が刊行された頃のことを思い出した。

私にとって中央公論社（中央公論新社）は、洪くて重厚なところがカッコいい出版社だった。入口は「あえて」付きで地味だが、入ってみればおもしろい——そういう本を出す出版社だと思っていたので、『赤頭巾ちゃん気をつけて』や『TUGUMI』が出て来た時にはびっくりした。特に、『赤頭巾ちゃん気をつけて』は、その刊行当時、主人公と私

橋本
治

は同年代で、一人称で語る主人公が力まず（言っちゃ悪いが）グダグダの日本語を使っているのが衝撃的で、「こういうのありなの？」とびっくりした。「これがありなら、自分もこの先生きて行けるかもしれないな」と思った。

『赤頭巾ちゃん気をつけて』は、画期的で、しかも紛れのない「青春小説」だった。それまでの日本には、『赤頭巾ちゃん気をつけて』のようなとりとめのない喋り方をする主人公を登場させる小説はなかった。現実にはこんな人間がいくらでもいるのに、そういう人間には「小説を支える力」がないと思われていたのだろう。喋り方が以前のものとは違うということは、論理の構造も違うということで、それまでグダグダでとりとめのない喋り方しか出来なかった私に、「そうか、これでもいいのか」と、『赤頭巾ちゃん気をつけて』は教えてくれた。だからと言って、別に「作家になりたい」とか「小説を書きたい」なんてことを思ったことはなかったけれど。

それまでの私は、青春小説を読みたいと思う気がなかった。「青春小説」と言われるものを読んで、おもしろくもなかった。『赤頭巾ちゃん気をつけて』を読んだ後で、「言語が違うからだな」とは思った。『赤



庄司薫

『赤頭巾ちゃん気をつけて』

1973年

頭巾ちゃん気をつけて』は、「言語が違う」という点で前衛で、しかし「普通に青春であるような普通の小説」だった。

二十歳を少し過ぎたばかりの私は、「こういう小説って、日本じゃ受け入れられないんじゃないの？」と、読んだ後で思った。日本文化というのはへんに閉鎖的で、過激なものならそのインパクトによって受け入れてしまうが、「普通のもの」に関してはそう簡単に受け入れられないものだと思っていたので。

『赤頭巾ちゃん気をつけて』は芥川賞を受賞したが、私にはそういう方面への関心がなくて、驚いたのは、その作品が固くて渋くて重厚な中央公論社から刊行されていたことで、私は「こういうのありなの？」と思った。つまり、「オジサンはこういうの認めるの？」で、そのところが一番の衝撃だった。

どの出版社にも、その出版社らしさがある。時は一九六〇年代の終わりでも、とても過激なものが流行った時だった。その中で、中央公論社は国会議事堂のように揺らがなかった。「そういう老舗ブランドがこういう小説を出すんだ」ということが私にとっての衝撃で、やがては「青春小説もそういう渋い認められ方をしないとだめなんだ」と思うよう



吉本ばなな

『TUGUMI』

1992年

になった。だから、『TUGUMI』が中央公論社から刊行された時は、少し羨ましかった。「中公ブランドの青春小説」というのは、私にとつては格別のものなのだ。

遠い明治の昔に日本人が「近代文学」なるものを始めた時、書き手はみんな若かった。十九歳で硯友社を結成して文学活動を始めてしまった尾崎紅葉は、二十三歳で文壇デビューをした。紅葉と同年の幸田露伴も二十二歳で文壇デビュー。坪内逍遙が『当世書生気質』や『小説神髓』の発表を始めたのが二十七歳。二葉亭四迷が『浮雲』を発表し始めたのは二十四歳の年で、樋口一葉が『たけくらべ』を雑誌に発表し始めるのも二十四歳。森鷗外も、『舞姫』を発表したのはまだ二十九歳だった。

みんなが若くて、彼等の書いたものは書き手の年齢相応ではあるけれど、だからと言ってそれが「青春小説」になるわけでもない。昔の二十歳は大人で、十代でも一高の学生になってしまえば一人前の「旦那様」扱いになってしまう。「青春」というのは「大人になりきれない年頃」だから、若くして「大人」になってしまうと「青春」が書けない。「青春」を書くのは後ろを振り返ることだから、前へ進むことを前提にしてしまった大人は、なかなか「青春」を振り返れない。二十四歳の樋口一

葉はそれをやつて、衝撃と感動を文壇にもたらした。

若いから「青春」というわけではない。「一人前になれていない」という思いを持ち越して、人の中に「青春」は宿る。夏目漱石が『坊っちゃん』を発表したのは四十歳の年だった。作家デビューの遅い夏目漱石は、その後で『草枕』以下の作品を発表するが、夏目漱石こそが「遅れて来た青春小説の作家」で、「青春小説の大成者」だろう。

もちろん、そんなことは誰も言わないだろう。日本の近代文学の中に「青春小説」は格別に分離独立されていなかったから、夏目漱石は「青春小説の書き手」とは殊更に意識されない。でも、夏目漱石の書くものは「青春小説」だから、明治の作家達の中でも例外的に、まだ現役の作家のような読まれ方をしている。

時がたつて、若かった作家達は若くなくなつて行く。あまり後ろを振り返ることなく、小説も「青春」から離れて行く。若者はいつの間にか「未熟なガキ」のようなものになるが、第二次世界大戦が終わると「ティーンエイジャー」というものが生まれる。大人と子供の間にある十代の時期で、これが特別視されて独立してしまつと、青春小説もまた分離独立してしまふ。それがいいんだか悪いのだから、私にはよく分からない

はしもと・おさむ
作家。一九四八年東京生まれ。東京大学文学部国文科卒。七七年「桃尻娘」で講談社小説現代新人賞佳作。

以後、小説・評論・古典の現代語訳・戯曲・エッセイ等、あらゆるジャンルに精力的な執筆活動を行う。九年「宗教なんかこわくない！」で新潮学芸賞、二〇〇二年「三島由紀夫」とはなにものだったのか」で小林秀雄賞、〇五年「蝶のゆくえ」で柴田錬三郎賞、〇八年「双調平家物語」で毎日出版文化賞を受賞。他に「案室 源氏物語」「小林秀雄の恵み」「巡礼」「橋」「リア家の人々」等、著書多数。

十代の時期は十代の時期で、やはり特別だと思う。しかしこれを分離独立させてしまうと、「いつまでも大人にならない」というものを増殖させてしまう。「青春」というものは、「青春じゃないもの」の中に混在してこそ、価値を発揮するものだと思う。だから、「青春」とはあまり関係がなさそうな顔をしている中公文庫の中に入っている青春小説は、高いハードルを乗り越えた価値のある作品ということにもなる。

「青春小説」などというジャンル分けを超えて存在している青春小説が、私は好きだ。

●三島由紀夫の庄司薫評

後に「庄司薫」のペンネームで活躍する福田章二は、東京大学在学中の一九五八年、「喪失」で第三回中央公論新人賞を受賞します（第一回は深沢七郎『楯山節考』）。当時の選考委員は、五十三歳の伊藤整と四十六歳の武田泰淳、そして三十三歳の三島由紀夫でした。

『中央公論』五八年十一月号掲載の「選評」を見ると、「長すぎる」「少年サロン小説という匂いがちよつと強い……感覚的な誠実さだけにたよったほうが、小説らしいと思うんだけどね」と批判的な三島を、「才能という点からいったら、相当なものですよ」（武田）、「すぐれた人だと思ふよりしようがない」（伊藤）と先輩作

家二人が説得する形で進み、最後に武田の「当選にしようじゃないか……三島君が大体その系統の先輩だから、三島君が非常に文句をつければ別だけどね」との言葉に、三島が折れる形で「喪失」の受賞が決まったようです。三島も福田章二と同じ東大出身、弱冠十九歳でデビューした「早熟の天才」でした。

ちなみに、二十六歳の江藤淳は『新潮』五九年一月号に「新人福田章二を認めない」を寄稿、福田の「学生である作家」という立場を強調する「処世上のカマトト」が「創作態度の根本」にある「不誠実さ」につながっていると批判しました。それに対して福田は、同誌翌月号の座談会で「ぼくの文学的態度というのにはきつといろんなコンプレックスがあるんだと思うのですよ」と述べ、たとえば「戦争とか革命」がもたらす「危機感」とは無縁な、「ある種の危険な安定感」のなかで「拡散していきそうな自分

自身の内面の屈折」を訴えました。同世代の多くが戦争で命を失った負い目を抱く三島と、八歳で終戦を迎えた福田との「世代差」が、そこにはあったのかもしれませんが。

後に、庄司薫名義で発表された「赤頭巾ちゃん気をつけて」が一九六九年度上半期の芥川賞を受賞した時、選考委員の三島由紀夫は「才気あふれる作品」「甚だ巧い」と絶賛しています（『文藝春秋』同年九月号）。三島が自衛隊市ヶ谷駐屯地で楯の会隊員とともに割腹自殺を遂げたのは、その一年後でした。

●ベストセラーを生んだアイドルの一言

吉本ばなな（現、よしもとばなな）が『キッチン』で海燕新人文学賞を受賞したのは一九八七年ですが、世間的に大ブレイクしたのは八九年一月、『コスモポリタン』誌が「今、吉本ばななが好き」という特集を組んだ頃からでし

ようか。若手の女性文化人たちが、「一つとしていけない言葉がない」（女優・中島唱子、当時二十二歳）、「私たちが今生きている生活に基づいたテーマなんです」（エッセイスト・群ようこ、三十五歳）、「穏やかな中に、みんなをフツと引き込んじゃうような力を持つてる」（DJ・千倉真理、二十六歳）、「時代の気分を楽しめたような感じ。フツと透明な空気に触れたみたいな」（漫画家・石坂啓、三十二歳）と大絶賛。

ブームのきっかけは、小泉今日子がテレビで『キッチン』が好きと発言した事とされていきます。『デイズ・ジャパン』八九年二月号で二人は対談していますが、「小泉さんが『ザ・ベストテン』で『キッチン』のこと、すごく褒めてくれたでしょ。あのあと、突然高校生から『生まれて初めて自分で本を買いました』みたいな葉書が来るようになって」「小泉さんが、読んでもくれる前は『若い人の感性が……』みたいな

大人の反応しかなかったんですね。だから、ずっと心細くて『伝わってるのかなあ、ホントかよ』っていう気持がすごくあったのね……（小泉さんのような）目が確かなんだなって思ってた人に褒めてもらって、すごく自信がついたっていう気がしてるんです」と嬉しさを隠さない吉本に対し、二十三歳のMYOONは、「モヤモヤと感じてたことが、吉本さんの本の中ですごくキレイな言葉になって『あ、そういうこと感じてたの私だけじゃなかったんだ』と思って、すごく安心して嬉しくなっちゃったんです。全然押しつけっぽくなく、漠然としたテーマを、サラッと書いてくれるから、ものすごく有難味を感じちゃった」と返しています。

対談の翌月に刊行されたのが、『TUGGUM I』（中央公論社）。単行本と文庫を合わせると累計で二七〇万部近くの大ベストセラーとなりました。（文書・編集部、敬称略、以下同）

問いかける人間の悲劇性

三浦雅士

——『高橋是清自伝』『回顧録』『上海時代』

中公文庫の特色を一言でいえば「人間的」ということだ。だが、「人間的」とはどういうことか。中公文庫について語ることはこの問いに答えることなのだが、これまでそういう観点から中公文庫が論じられることはあまりなかったように思われる。

たとえば中公文庫のなかで代表的と思われるものを挙げよと言われれば、たちどころに『高橋是清自伝』、のぶあき牧野伸顕『回顧録』、松本重治『上海時代』の三冊が浮かぶ。名著はほかにもおびただ夥しいが、この三冊が中公文庫の特色をもっともよく表わしているからだ。いずれも現代史を生きた人間の實話であって、歴史上の人物がじつによく活写されている。

この三冊がそろって近代日本の政治の動きを外国の視点をも交えて——むしろ外国の視点から——描き出していることは言うまでもない。

その政治への視点が、たとえば岩波文庫の一面を代表する福沢諭吉の

『福翁自伝』とも、また河上肇の『自叙伝』とも違っている。高橋、牧野、松本の三冊は、時勢の推移を語りながら、政治にせよ経済にせよ社会にせよ、畢竟、人間の仕業であると思わせる。福沢の自伝は日本の文明開化を語ってきわめて興味深いのだが、高橋が日露戦争を語り、牧野が第一次大戦を語り、松本が日中戦争を語るようには、政治に言及しているわけではない。福沢の自伝も「人間的」といえば「人間的」のだが、中公文庫の特色としての「人間的」とはちよつと違っているのである。河上の自伝は「人間的」というよりは「個性的」すなわち癖が強いとでもいうべきものであつて、まったく異質である。他方、中公文庫の三冊は、大河の流れを俯瞰しながら、その流れが生身の人間たちによつて形づくられるものであることを強く感じさせる点で共通している。

とはいえ、人間は歴史を作るが思うようにはないというマルクスの言葉がここで思い浮かぶのだが、三冊ともに結局、時の流れを作り出しながらかえつてその時の流れによつて押し流されてゆく人間の姿を描くことになつてしまつたという印象が打ち消しがたく強い。たとえば牧野はその十代に西南戦争を体験しているが、描き出された西郷隆盛はまさにそういう人間の運命を象徴している。牧野は西郷と肝胆相照らす仲だ



高橋是清

『高橋是清自伝』上下

1976年

った大久保利通の次男である。西郷と島津久光すなわち旧藩主との関係などじつに鋭い眼で描かれている。西南戦争は西郷が犠牲になることによつて、結果的に全国の不平士族に維新の何たるかを思い知らせる働きをしたわけだが、牧野は次のように述べている。

「心ではそういうことを承知しながら、西郷は何もすることができなかつた。これは実に悲劇的なことであつて、事態がそのようになるに誰にもその推移を支配することは出来ないのではないかと思う」

牧野がここで用いている「悲劇的」という言葉が、先に述べた「人間的」という言葉の実質であると思つてもらつていい。この悲劇が、個と集団のある種の振^ねじれによつて生じることは指摘するまでもない。個人は集まつて集団をなすが、形成された集団は新たな別個の人格となつて諸個人に襲いかかるのである。時勢とはそういうものだ。高橋も牧野も松本も、結果的にこの個と集団の振^ねじれ、すなわち時勢を描くことになつた。それが私にはきわめて興味深く、それこそ中公文庫の特色であると感じられるのだ。

どの文庫であれ、評価において、あるいは売行きにおいて高い成績を示した著作を取録するわけだから、文庫の特色など論じてもしようがな



牧野伸頭

『回顧録』上下

1977～78年（品切れ）

いようだが、中公文庫に關しては違ふ。古今東西の名著を集めることを特色とする岩波文庫とはまた違った意味で、違ふのである。中公文庫はこの言わば「人間の悲劇性」についてきわめて鋭敏なのだ。そのことは、松本の『上海時代』がほかならぬ中央公論社の雑誌、つまり『中央公論』の姉妹誌とも言うべき『歴史と人物』の所産であるところに明瞭である。『上海時代』は『歴史と人物』に連載され、後に中公新書として刊行され、さらに中公文庫に入った。高橋の自伝も牧野の回顧録も、ある種の同質性が認められて中公文庫に収録されているのだ。ここには、潜在的にであれ、明瞭な方向性を見ることができるといえる。

松本は高橋、牧野に比べればほとんど孫の世代にあたるが、しかしここに描き出された人物たちはみな同じように個と集団の捩じれにさらされている。個人は好むと好まざるにかかわらず集団すなわち時代に押し流されてゆく。高橋、牧野から松本へと移るわずか数十年のあいだに、国家および国家間すなわち国際的な次元のありようがはるかに分厚くなってしまっているのである。おそらく松本自身、時代を俯瞰する眼を持つていたからだろう、そういう面が強調されている。

松本はロイター通信のチャンセラールとの出会いが自分にとって決定的



松本重治

『上海時代』上中下

1989年 (品切れ)

だったとしているが、そのチャンセラーの特技として「十分間ぐらいで、英国の内政、外交や経済のことを実に要領よく説明」することを挙げ、「複雑な諸問題をマクロ的に把んで『それはこうだ』というふう到大綱だけを話し得るといふ彼の能力に、私はいつも驚嘆していた」と述べている。松本はもちろん、高橋も牧野も、同じ能力を持っていたように思える。この能力のもとでは、あえて言えば、人間は誰でも悲劇的側面を見せてしまうのである。

高橋が日露戦争下、ロンドンで戦時国債を発行するにあたって八面六臂はちめんろくべの活躍をしたことは広く知られているが、その際、シフ財閥をはじめとするユダヤ財閥の協力が与あずかって力のあつたことは必ずしも知られてはいない。興味深いのはしかし、その国際的なユダヤ財閥でさえも所属する国家の威信に応じて働いていることであつて、二十世紀初頭の段階で、国家があたかも人格を持った個人であるかのように働くことは自明の前提になってしまっているのである。個と集団の捩じれが、国家という法人において決定的な次元として凝固してしまっているのだ。これはおそらく十七世紀、十八世紀には考えられなかったことではないだろう。少なくとも、都市や地方の次元が薄まり、国家の次元が度外れに強

まったことは否定できないと思われる。牧野は第一次大戦後のパリ講和会議のありさまを描いているが、ウイルソン米大統領の姿がその国際性の肥大化——すなわち国家の肥大化——を象徴している。個人は国家的自我を通してしか機能しない時代に入ったようにさえ見えるのである。個と集団の扱じれが極点に達したようなものだ。

中公文庫が問いかけるものとしてこの事実を強調するのは、二十世紀に入って状況が大きく変化しているように見えるからだ。表面的には国家の比重は増すばかりだが、インターネットそのほかの通信手段、表現手段の発達が、英語の国際言語化が決定的になったことと相俟^{あいま}って、事態を未曾有の段階へと推し進めていることは疑いようがないのである。むろん、個と集団の扱じれが解消することなどありえない。人間を人間にしたのは言語だが、この扱じれは最終的に、言語は集団に属するにもかかわらずただ個を通してしか働かないという矛盾に帰着するからである。人間の悲劇はしたがって言語の悲劇なのだが、国際性が国家を呑み込みつつある現在、その悲劇がいつそう強まるのか、あるいは決定的に変質するのか、ここには深く考えるべき問題が潜んでいる。

中公文庫はそれを考えるときに参照すべき文献の宝庫であると思える。

みうら・まさし

文芸評論家。一九四六年青森生まれ。「ユリイカ」『現代思想』編集長を経て、八〇年代に文芸評論に転じる。九〇年代、新書館編集主幹として、月刊『ダンスマガジン』季刊『大航海』などを創刊。現在は『ダンスマガジン』顧問。主著に『メランコリーの水脈』（サントリー学芸賞）、『身体の零度』（読売文学賞）、『青春の終焉』（伊藤整文学賞）など多数。二〇一〇年紫綬褒章を受章。一二年日本芸術院・恩賜賞受賞。

●ベストセラーが生んだ慣用語

戸部良一他著『失敗の本質——日本軍の組織論的研究』がダイヤモンド社から刊行されたのは一九八四年。柳田邦男のエッセイによれば「新聞・雑誌の書評にはほとんど取り上げられ」なかつたのに「八月に入った頃から、ビジネスマンの間でよく読まれているらしいという話を耳にするようになり、口コミでベストセラーとなつたとか。柳田は、本書が指摘する「日本軍の欠陥」の残滓」は「現代の企業人」にも「うなずくところの多い」からではないかと指摘しています（『週刊現代』十月二十七日号「ビジネスマンは『失敗の本質』をなぜ読むか」）。

中公文庫に収録された九一年は、バブル景気が弾ける直前でした。その後もロングセラーとして版を重ね、近年でも、ローソンの新浪剛史社長（『プレジデント』〇九年二月号「危機にもぶれない！ 強かな経営理念を養う指南書」）、や田原

総一郎（『アサヒ芸能』一三年三月七日号「激動の時代を生きる」トップ5冊）が、日本軍の失敗と社会の現状を重ね合わせつつ取り上げています。

「失敗の本質」を慣用語的に使った雑誌タイトルも目につきます。「若者が『イッキ』してる間に社長『解任』 居酒屋チェーン失敗の本質」〔FRIDAY〕八七年十一月二十日号）、「経営アナリストが見た野村阪神『失敗の本質』」〔週刊文春〕〇〇年十月十九日号）、「国連・常任理事国入り失敗の本質 ドイツと組んだ外務省の大錯誤」〔AERA〕〇五年九月二十六日号）、「日本の再生の道筋 失われた20年失敗の本質」〔週刊東洋経済臨増〕一二年二月二十九日号）、「政権交代は何をもたらしたのか 民主解体『失敗の本質』」〔文藝春秋〕一二年八月号）……。特に低迷期に入ってから使用頻度が増えたような印象があります。

●歴史全集の世界

中央公論社が、創業七十五周年を記念して『世界の歴史』（全十六巻別巻一）の刊行を開始したのは一九六〇年。一人の筆者が一巻すべて執筆するスタイルは画期的でした。六五年には『日本の歴史』（全二十六巻別巻五）の刊行が始まります。

『日本の歴史』では、現在の歴史番組でよく使われる「再現ドラマ」的な手法が少なくありません。第二巻『古代国家の成立』（直木孝次郎）には、聖徳太子の死後、ともに推古女帝を支えてきた蘇我馬子が「そもそも苦心に苦心を重ねて仏教を日本に広めたのは、おれの一族ではないか。……ところがいまでは、太子が仏教交流の守り本尊のようにもはやされている。いや、いまはまだおれたち父子の功績を知っている者が多いからよいが、おれの死んだあとではどうなるか知れたものではない」と呟く場面があり

ます。史料にはない小説のような叙述について、附録の月報で著者の直木孝次郎と対談した司馬遼太郎は「これは踏み込んでサービスマンと感心したんですな。百万人の歴史書というものは、ああいうところまで踏み込まないといけない」と絶賛しました。

その後、『日本の歴史』は中公文庫創刊と同時に文庫化が始まり、ロングセラーとして親しまれています。二〇〇四年から〇六年にかけて最新の研究成果を取り入れた「解説」を付した改版が行われました。一九六〇年刊行の『世界の歴史』は現在品切れですが、九六〇九九年に刊行された新しい『世界の歴史』（全三十巻）が、二〇〇八〜一〇年に文庫化されました。他に『日本の古代』（全十五巻別巻二）、『日本の近代』（刊行中）等も。異例の売れ行きで話題になったマクニール著『世界史』（上下）も、この伝統の上に生まれたものといえるでしょう。

谷崎潤一郎と中公文庫

—— 『青春物語』 『蘆刈』 『武州公秘話』 『陰翳礼讃』

小谷野敦

谷崎潤一郎の中公文庫については、思い出がある。谷崎の『青春物語』が中公文庫に入ったのは、一九八四年九月のことだ。私は大学三年生で、某家庭教師センターに登録して、かなり出来の悪い高校生を教えていた。そのセンターでは、首都圏の教師たちは、月に一度、日曜の早朝から、渋谷で開かれる例会に出席することを半ば義務づけられていた。そこで、院長先生という人物の話や、ゲストの講演を聴いて、それぞれの教師の担当のチューターという人と個別に会合を持つのである。私の担当は、高校教師を定年になったおじいさんだった。さて、ちょうどその九月、眠い中を、家から二時間はかかる会場まで行き、チューターを囲んでお昼を食べるうち、大学の理系の先輩らしき男性と、帰路が一緒になり、そのまま渋谷の紀伊國屋書店へ寄ったのだ。すると中公文庫の新刊のポスターが下がっていて、その男性は、「あれえ、谷崎潤一郎っ



中公文庫

谷崎潤一郎
『青春物語』
1984年（品切れ）

てまだ生きてるんだっけ」と言った。つまり、新刊として『青春物語』が出ていたので、生きていたかと思っただのである。『青春物語』は、一九五六年に角川文庫から出ていたが、とつくに絶版になっていた。

一般の人は今でも、本というものはみな、出てから二、三年たつと「文庫判」になるものだと思っている。そういうところから来た勘違いで、東大でも理系の人などは、よくこういうことがあった。私が谷崎の作品をまとめて読んだのは大学院へ入ってからなのだが、高校時代から大学時代にかけて、岩波文庫の『源氏物語』本文と、中公文庫の谷崎訳とを、一帖ずつ交互に読んでいたことがあり、原文にならって主語を省略してしまう谷崎の訳し方をすごいと思ったりしたものだが、しかしやはり初心者にはきついかも知らない。『細雪』だけは、母のものだった角川文庫版全三冊が家にあつたので、それで大学時代に読んでいた。

文庫といえは新潮文庫で、特に谷崎は、のち九〇年代に細江光の詳細な注がつくのだが、当時はまだなく、しかも『春琴抄』など、小さな活字が活版印刷でぎちぎち詰め込んであった。中公文庫は表紙のデザインもとりどりで、これで『蘆刈』『武州公秘話』『陰翳礼讃』などを読んだ。

谷崎は、何人かの日本近代の「文豪」の中では、唯一、中央公論社か



谷崎潤一郎

『蘆刈』

1985年 (品切れ)

ら全集が出ている作家である。もともと『中央公論』は、大正期には名編集者・滝田樗陰ちゅういんを抱えて、文壇のひのき舞台だったから、新人作家は、樗陰の人力車が家の前に止まるのを待ち焦がれたもので、谷崎の場合も、樗陰が来た時出迎えたのは、これもものち作家になる弟の精二だったが、「これで兄も世に出るかな」と思ったという。

だが中央公論社は、単行本を出さなかった。出すようになったのは、樗陰が死んだあと、昭和に入ってからで、最初に出したのが、レマルク作、秦豊吉訳の『西部戦線異状なし』で、これがベストセラーになった。春陽堂、改造社といった出版社が後退したり倒産したりして、岩波書店、新潮社、講談社が勢力を伸ばす中、谷崎は嶋中雄作、鵬二の二代の社長と親しく、中央公論社の作家として残ったのである。

ほかに、谷崎は、関西にいた時に、創元社との縁も深く、あちこち住居を転々とした時に、本籍地を創元社の住所にしてしまったこともあるくらいだ。『春琴抄』の表紙を吉野紙にして出したのも創元社だ。だが創元社は、戦後は東京支部の東京創元社が一時倒産するなどして、あまり伸びなかった。

ほかに、中公文庫はユニークな作品を揃えていて、川端康成の作品



谷崎潤一郎

『武州公秘話』

2005年

も、『美しさと哀しみと』など、よく買った。もつとも、料理の本や山の本や、『折口信夫全集』は、あまり私とは縁がなかった。

さて、『青春物語』は、刊行されてから三年たつてやはり購入したのだが、この本は、私にとつて重要な本になったのである。私は英文科の大学院を受けて落ち、翌年比較文学の大学院へ入るのだが、そのため浪人生活をしていて、その冬に、ふとしたきっかけから神経症に罹った。床屋へ行って切ってもらっていた時に、はさみの先端が首に当たった。

その時、こんなところからエイズになるのではないか、と思うと、突然ぞぞぞつと足元からはい上がってくるような恐怖に襲われて、床屋のケープをむしり取つて、表へ飛び出したい衝動に駆られた。あるいは夜中に、いてもたつてもいられなくなり、外へ飛び出しては長い長い散歩をしたりした。実は谷崎も、若いころこの神経症にやられたのであった。やはりその頃読んだ、夏目漱石の『行人』にも、漱石自身の体験であるう、いてもたつてもいられなくなるという不安神経症の症状が記されていた。

21
だが、谷崎をもつとも悩ませた、『青春物語』の結末に置かれている、汽車恐怖症に私も罹ったのは、それから七年後、大阪へ行ってからのこ



谷崎潤一郎

『陰翳礼讃』

1975年

とだった。各駅停車なら何とかなるが、ひかり号など、長時間停車しない汽車に乗るのが恐ろしいのである。最初の時は、修士論文執筆で懸命になっていくうちに治ったが、この時は長く苦しんだ。結局は葉を呑み、今のところは、静岡で止まるひかり号なら乗れるようになったけれど、新横浜から名古屋までノンストップというのは、まだ自信がない。

谷崎は、一度治ってから、大正改元の年に長田幹彦と一緒に京都に遊んだ時に再発して、徴兵検査を受けなければならぬのに汽車に乗れないため帰京することが出来ず、京都で受けようとしてそれも間に合わず、遂に友達につきそってもらい、ウイスキーをちびちび飲んで恐怖を紛らわしながら東京へ帰った。ここで『青春物語』は終わっている。

だが、本当に汽車恐怖症は完治したのだろうか。谷崎はそれ以後、盛んに関東と関西を往復するようになるが、それは夜行であることが多く、乗らずにいると再発するという懸念もあったのではないか。また晩年、谷崎はノーベル賞候補だったと最近また言われているが、谷崎は一度だけ、こわごわ伊丹から羽田まで飛行機に乗ったことがあるだけで、受賞してもストックホルムへは行けなかったのではないか。数年前受賞したオーストリアのイエリネクも、飛行機恐怖のため受賞式に欠席している。

◇こやの・あつし

比較文学者。一九六二年茨城県生まれ、埼玉県育ち。東京大学文学部英文科卒業。同大学院比較文学比較文化専攻博士課程修了、学術博士（比較文学）。大阪大学言語文化部助教授、国際日本文化研究センター客員助教授などを経て、文筆業。おもな著書に、『男の恋』の文学史、『もてない男』『江戸幻想批判』『聖母のいない国』『恋愛の昭和史』『谷崎潤一郎伝』『里見弴伝』『現代文学論争』『久米正雄伝』『文学賞の光と影』『日本恋愛思想史』『川端康成伝』ほか多数。小説『母子寮前』（芥川賞候補）などがある。二〇〇二年、『聖母のいない国』でサントリー学芸賞受賞。

今では「パニック障害」という言葉もよく知られているが、当時は、電車に乗れないという病状もあまり知られておらず、谷崎も、それを知られるのが恥ずかしいためあれこれ理由をつけている。私もそうで、人はこの病気について聞いていても、深刻には受け取ってくれなかった。そんな中で、私はあの豪快そうな文豪・谷崎が同じ病気だったということに勇気づけられたものだが、私が谷崎の作品を網羅的に読んだのはずっとあと、伝記を書いた時のことだから、もし『青春物語』が文庫になっていなかったら、私はこの中編を読む機会はその時までなかっただろう。

●戦時中の言論統制と中央公論

古い商家の四姉妹を中心に、大阪の上流階級の生活を、上品な船場言葉せんばの会話で綴った谷崎潤一郎著「細雪」の連載が『中央公論』で始まったのは太平洋戦争真っ直中の一九四三（昭和十八）年新年号です。隔月連載の予定でしたが三月号掲載の第二回を最後に中断、同年六月号

に「決戦段階たる現下の諸要請よりみて、或いは好ましからざる影響あるやを省み、ここに自肅的立場から今後の掲載を中止いたしました」との社告が掲載されました。

戦前日本には検閲制度がありました。伏字を施せば発行でき、「発禁になったほうが売れる」という風潮もあったようです。しかし日中

戦争が始まってからの統制は厳しさを増します。『中央公論』三八年三月号は、石川達三が従軍経験をもとに描いた小説「生きている兵隊」が原因で、発売後ただちに発禁処分となりました。『前線兵士の実態、軍紀の弛緩などを赤裸々に描いていたためです（『中央公論新社120年史』）。石川と雨宮庸三編集長が禁固四ヶ月の判決（執行猶予三年）を受けました。現在、中公文庫に収録されている『生きている兵隊』では、伏字の部分を復元しています。

以来、『中央公論』は軍部から睨まれるようになりました。四一年二月、内閣情報局が示した雑誌執筆禁止者リストには、水野広徳、馬場恒吾、清沢洌、田中耕太郎、横田喜三郎など、中央公論社と関係の深い知識人が含まれていました。「中央公論社は、ただいまからでもぶつぶして見せる！」と公言した軍人もいたとされています（発言の主とされる鈴木庫三陸軍中佐

の実像については、佐藤卓巳著『言論統制』『中公新書』を参照ください。また、二〇一三年九月には馬場恒吾の評伝である御厨貴著『馬場恒吾の面目——危機の時代のリベラリスト』が中公文庫に収められています。

「細雪」連載中止の後も、当局の弾圧は続きました。四三年六月号に掲載された岸田國士の戯曲「かえらじと」を理由に翌七月号が休刊に追い込まれました。同年五月から翌年一月にかけて、共産党再建をはかったとして社員が次々検挙される横浜事件（二人が取り調べ中に獄死）を経て四四年七月、中央公論社は自主廃業に追い込まれたのです。

「細雪」が掲載禁止処分になった直接の原因は、その内容が戦時下にふさわしくないという理由でしたが、谷崎自身の自由奔放な生き方が、当局の反感を買っていたからかもしれません。

●細君讓渡事件

谷崎は一九一五（大正四）年、二十九歳で石川千代と結婚しますが、やがて千代の妹せい子に惹かれ、千代と不仲となります（せい子をモデルとして書いた『痴人の愛』で一躍有名になるのは二四年）。千代は、彼女に同情した作家・佐藤春夫と恋仲となりますが、佐藤もまた既婚者でした。もつれにもつれた愛憎劇にピリオドを打ったのが、いわゆる「細君讓渡事件」です。

一九三〇（昭和五）年八月十八日、谷崎と千代は離婚、同時に千代は妻と別れた佐藤春夫と結婚、三人連名で「我等三人この度合議をもつて、千代は潤一郎と離別致し、春夫と結婚致す事と相成り」との声明文を発表しました。声明文は翌日の各紙を飾りました。

当時の新聞を読むと、「共同声明書を見るに、『朗らか』という感じがする……将来とても万事うまく行くだろう」（里見弴）、「（姦通という）

言葉が一般の人の心に生み出す一種のいやしい気持ち^よを以って、人間の真剣な心の交渉を眺めるのは宜しくない……興味本位で眺めたくはない」（柳原白蓮）と、意外にも好意的な発言が取りあげられています（『東京朝日新聞』八月十九日付）。当事者たちも「非常にさっぱりした」（谷崎）、「世間にシヨックを与えたようですが、別段われわれとしては大したことないのです」（佐藤）とあっさりしたもの（『大阪毎日新聞』八月二十日付）。日中戦争勃発前には、まだ社会に自由な雰囲気が残っていたのかもしれませんが。九三（平成五）年、事件の最中に佐藤春夫に当たった谷崎の書簡が発見され、『中央公論』は同年四月号、六月号と二度にわたって紹介（水上勉が解説執筆）しました。九七年には新資料をもとに瀬戸内寂聴が『つれなかりせばなかなかに——文豪谷崎の「妻讓渡事件」の真相』を上梓しました。

日本人論の系譜

岡崎武志

いま、中公文庫編集部編『中公文庫解説総目録 1973～2006』が手元にあつて、その「書名索引」からわかるのは、「日本」をタイトルに頂く書目がいかに多いか、ということだ。「日本」「日本語」「日本人」とバリエーションはあるが、これを一つと見て、七十六タイトルある。これに次ぐのが「江戸」の三十八か。

つまり、今年で創刊四十周年を迎える中公文庫は、その途上で「日本」を語って飽きることがなかったシリーズ、と言つてもいいだろう。

しかも、今回、参考資料として編集部から数冊の日本人論が届いたが、会田雄次『アーロン収容所』、梅原猛『地獄の思想』、小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』、梅棹忠夫『文明の生態史観』

など、「日本」をタイトルに含まぬ日本人論が多い。これらをカウントしていけば、該当する書目はさらに増える。その手法もテーマも多岐にわたり、扱う時代も広範だ。

日本人論は、マルコ・ポーロ『東方見聞録』を嚆矢とし、ザビエルを始めとする宣教師たちの印象記により、初めて自覚化されたと言つてもいいだろう。鎖国政策により、長く小さな島国に閉じこもっていた日本人は、いわば自分の顔を鏡で見ることがなかった。海外から渡来した人々により、初めて「鏡」を突きつけられたのだ。

ドナルド・キーン『日本人の西洋発見』(品切れ)を読むと、本多利明、司馬江漢、間宮林蔵など、十八世紀末期から、西欧に強い関心を持つ日本人がいて、かの文明に通じていたことがわかる。それは「他のいかなる非西欧諸国と比べても一段と進んだものだった」とキーンは書く。しかし、それはあくまで一部の知識人たちであった。

司馬遼太郎対談集『日本語と日本人』に、司馬と井上ひさしの対話がある（一九七七年『週刊読売』掲載）。ここで司馬は、「何しろ世界に目ざめたのは三十年前ですものね。紀元前から文明があるのに、日本だけが敗戦になって、初めて世界があるということを知ったわけでしょう」と語っている。たしかに敗戦がもたらした、いや応のない「国際化」が、自国および国民や文化に対する新鮮な批評を生む動機となった。中公文庫で触れられる「日本人」論の豊かな成果は、すべてその所産である。

これほど多種の「日本人」論を多年にわたって生み出し、そのほとんどがロングセラーとして長く読まれていることを、中公文庫の大きな特色だと考えていいだろう。その流れを決定づけたのが、会田雄次の『アーロン収容所』だった。もとは中公新書に入っていたが、中公文庫創刊の年、一九七三年に収録。新書から文庫へのトレードはこれ

が初めてか。それだけ本書のインパクトは大きかった。文庫カバリの惹句には「今日の日本人論純出の導火線となった名著」と力強く自讃している。著者は、京都帝国大学卒業後、四三年に応召されベルマ戦線へ。終戦直後より二年間、英軍捕虜となりラングーンで強制労働に服す。激しい苦役、堪え難い飢え、そして直面する外国人としてのイギリス人の正体が綿密に叙述される。

著者は西洋史を研究する学徒であったが、日々接するイギリス兵は、机上で学んだヨーロッパの姿とは、まるで違ったものだった。「恐ろしい怪物であった」と書いている。その直截な物言いの向こうで、対象化された日本人の実像も、また浮かび上がってくるのであった。

翌年の七四年に中公文庫入りした梅棹忠夫『文明の生態史観』は、世界中くまなく踏査した著者ならではの著書。『地球時代の日本人』（品切れ）、『日本とは何か』などの著書でわかる通り、つね

にフレッシュな眼で日本と日本人が相対化されている。「日本は、中枢神経系の極度に発達した小型の脊椎動物のようなものだ。機敏で、新陳代謝はさかんだけれど、体のごく一部に傷をおうただけで、ときにはそれが致命傷にもなりかねない」といった考察が随所にあり、読者は知的刺激を受けるのだ。

以後、小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』（一九七八）は、戦後の豊かな平和社会が生み出した、どの党派にも組織にも帰属感を持たぬ「万年青年的な心性」を「モラトリアム人間」と呼び、流行語にもなった。心理学的アプローチからの新しい「日本人論」として、いまなお有効である。

山崎正和『柔らかい個人主義の誕生』（一九八七）も、多産な「日本人論」の最大の成果の一つ。七〇年代から八〇年代への移行における、消費生活の変化のみごとな洞察。また、そのことがもたらした「個人主義」の変質を「柔らかい」という

ことばで表象させる手際のよさは、それが同時代史であることを忘れさせるほどだ。

「あくなき物質的濫費に耽溺してゐるやうに見え、快楽主義はすでにつきの時代の精神を決定してしまつた」という半世紀近く前の裁断は適中し、「つぎの時代」を生きてしまつた我々を畏怖させる。

九〇年に元本が出て、九九年に中公文庫入りした青木保『日本文化論の変容』は、戦後日本で書かれた日本文化論を、独自に設けた時代区分のなかで紹介しながら、その変容を追う労作（吉野作造賞受賞）だ。インターネットが普及する以前の七〇～八〇年代に、こうした優れた日本人論が輩出し、またそれが一般の読者によく読まれたことは興味深い。

高度成長期からバブル崩壊へ、あまりに急ぎ過ぎた進化の過程で、つねに日本人は自分の立ち位置を確かめる必要があつた。「日本」とは何か、「日本人」はいかに生きるべきかを、問い続けた戦後

五十年とも言えるだろう。

中公文庫所収の「日本人論」は、勤勉で性急な教養人たちの要請によく応えた。これらの「日本人論」は、けっして読みやすい著作ばかりではない。手軽な啓蒙書や、読み捨てのビジネス書の類とは違うのだ。ネット上の情報に溺れて、一冊の本と真剣に向き合う姿勢がもし崩れたら、優れた「日本人論」が生まれても見過ごされてしまっただろう。最近では、松山巖『群衆』(二〇〇九)は、近代から現代へ、「群衆」のキーワードのもと、日本人を論じた名著。ぜひ手に取っていただきたい。

おかざき・たけし 書評家、古本ライター。一九五七年大阪府生まれ。立命館大学卒業後、高校の国語講師を経て上京、出版社勤務の後フリーライターに。著書に『読書の腕前』『女子の古本屋』『古本道入門——買ったのしみ売るよろこび』『蔵書の苦しみ』等。

●週刊誌の『日本人論』

日本人論華やかなりし七〇年代頭、『週刊読売』(一九七一年五月七日号)は、「特別企画 日本人」と題し三〇ページにわたって特集。会田雄次、尾崎秀樹らの論考、奈良林祥の「性意識ではまだまだ 世界の田舎もん」と並び「日本人とは何か」なる著名人アンケートが行われました。その回答を見ると、「おじぎのしすぎ」(井上光貞)、「教育水準が高い」(藤井丙午)、「アジア人を小バカにする」(小中陽太郎)、「自由をはき違えてる若者」(E・H・エリック)、「マナーわきまえぬ」(浅丘ルリ子)、「おおらかさに欠けている」(富永一朗)、「大和魂がある」(谷岡ヤスジ)、「ほんとうによく働く」(花登筐)、「ありすぎるのぞき趣味」(鶴田浩二)、「着物の美しさがいい」(三遊亭円楽)、「へりくだりすぎる国民」(中村乃武夫)、「潔くない民族？」(渥美清)。これが当時のわれらが『自画像』。

中公オリジナル・

エンターテインメント

香山二三郎

中公文庫はエンターテインメントのジャンルでも人気作品を輩出している。二〇〇四年一月刊の『雪虫』に始まる堂場瞬一の『刑事・鳴沢シリーズ』はその代表格。それをきっかけにミステリーとりわけ警察小説作品が充実していき、現在中公文庫の強力な武器になっているのだ。

というと、ここ一〇年で急速にエンタメ路線が進んだように思われるかもしれないが、実は中公文庫には創刊以来、現代の警察小説のベースとなる傑作が数多く収められてきた。

たとえば、**結城昌治**。本格ミステリーはもとよりスパイ小説からハードボイルド、ユーモア推理に至るまで、結城は今日お馴染みのジャンル作品

を見事に先取りしていたが、中でも長篇『夜の終る時』（品切れ）は組織に生きる警察官の屈折した生きざまを浮き彫りにした、悪徳警官もののパイオニアとなる傑作だった。

またたとえば、**生島治郎**。暴力組織に挑む退職刑事の活躍をクールなタッチで描いた直木賞受賞作の長篇『追いつめる』（品切れ）は正統派ハードボイルド路線の先鞭をつけた。

考えてみると、一九七三年の創刊当時高校生だった筆者は、結城や生島、都筑道夫や三好徹といった先達たちの傑作を中公文庫で読むことで、日本ミステリーの面白さを知ることが出来たのである。

彼ら先駆者の作品を踏まえ、現代の警察小説も進化を遂げた。警察小説自体、昔から根強い人気を持つジャンルだったが、新たな刑事ヒーロー像を築いた大沢在昌『新宿鮫』のシリーズやリアルな捜査劇を描いた高村薫『マークスの山』等が登

場した一九九〇年代に多様化が進み、捜査刑事で

はなく管理部門の警察官の姿をとらえた『陰の季節』の横山秀夫の登場により、人気に拍車がかかった。

二〇〇〇年代の警察小説にはしたがって、これまでにない独自の魅力が求められるようになった。前出の『刑事・鳴沢了シリーズ』を例にとれば、新潟の警察官一族に生まれ自らも県警の刑事となった鳴沢は、ある事件を契機に家の秘密を知ってしまう。やがて故郷を捨て上京した彼は警視庁の所轄の刑事として働き始め、様々な警察署で活躍していく。著者は硬派刑事の生きざまを家族の系譜をからめ、サーガのスタイルでつむぎ出してみせたのである。

このシリーズは全一〇作で完結したが、堂場瞬一はその後も『長き雨の烙印』に始まる地方の架空都市を舞台にした『汐灘サーガ』や、『蝕罪』に始まる『警視庁失踪課・高城賢吾シリーズ』を

中公文庫で展開している。

ただし、その『失踪課』シリーズも一〇作目となる二〇一三年六月刊の『献心』で完結。シリーズ完結に当たって、著者は中央公論新社の堂場瞬一特設サイトで『「失踪課」シリーズは、『とにかく殺人事件を起こしておけ』という普通のミス터리に対する個人的な挑戦でもありました。死体がなくともミス터리は成立するかどうか。その判断は読者の皆さんに委ねるしかないのですが、いかがだったでしょうか』という言葉を残している。ひと口に警察小説といっても、今日のそれは様々な作風に彩られているのだ。

堂場と並ぶミリオンセラー作家・菅田哲也の場合は、女刑事ふたりを主人公に警察小説を書いてという編集者の要望で『ジウI 警視庁特殊犯捜査係』に始まる『ジウ三部作』に着手したという。都内で起きた人質籠城事件を皮切りに巨大な事件が動き始め、警視庁特殊犯捜査係（SIT）やさ

らに警視庁特殊急襲部隊（S.A.T.）が乗り出す。著者はそこでふたりの対照的な女性刑事の姿を描写するだけでなく、現代のテロ犯罪のありようをも浮き彫りにしてみせた。

警察の闇をとらえた『ハング』や公安警察の活動を描いた『国境事変』等、中公文庫の誉田作品は単発系にも独自の工夫が凝らされている。

人気作品はまだまだある。警視長以下五人のキャリア警察官が何故か日の当たらない部署に集められる富樫倫太郎『S.R.O.I 警視庁広域捜査専任特別調査室』のシリーズや、ある事件をきっかけに警視庁組織犯罪対策部を辞したラブルシューターに転じたタフガイの活躍を描く矢月秀作『もぐら』のシリーズも順調に版を重ねている。

前者はちよつと異色のキャリア警察官ものといふだけでなく、敵役に冷酷な天才犯罪者を用意して海外作品にも匹敵するサイコサスペンス系の独自の世界を展開している。二〇一三年三月まで五

作が刊行済。

いっぽうの矢月作品は、何といっても主人公の「もぐら」こと影野竜司のヒーローキャラクターにご注目。東京・渋谷の裏世界の覇権をめぐる抗争に巻き込まれた影野は凶悪な敵を相手に死力を尽くす。銃器アクションも取り入れたバイオレンス描写のキレといい、このジャンルのパイオニア・大藪春彦の再来を思わせるが、アクションだけでなく思いも寄らないサブライズを仕掛けるミステリー心にも溢れている。こちらは一三年二月まで六作が刊行されており、同年一〇月に完結編が書き下ろしで刊行される。

警察ものではさらに『フェイスレス——警視庁墨田署刑事課特命担当・一柳美結』を皮切りとする沢村鐵の新シリーズもスタートした。大学教授爆殺事件からやがて国際的なサイバー犯罪者の名前が浮かび上がってくるが、本格的な対決劇はこれから。中公文庫は新鋭の開拓にも余念がない。

おっと、警察小説人気を高めた立役者のひとり忘れてはいけない。テレビドラマでお馴染

み、東京湾臨海署の刑事の活躍を描いたロングセラー『安積班シリーズ』の今野敏である。今野は多くのシリーズを持つことで知られ、中公文庫でも『虎の道龍の門』や『復讐 孤拳伝1』のような拳法アクションものが主流のようだが、『触発』や『アキハバラ』といった大がかりな事件の顛末を描いた警部補・碓氷弘一のシリーズもちゃんと収められている。『安積班シリーズ』や『隠蔽捜査』のシリーズとはひと味異なるタッチをお楽しみいただきたい。

ミステリーでは警察小説のほかにも、留学生が持ち帰ったペスト菌の恐怖とストーカーの狂気が交錯する『彼方の悪魔』等の小池真理子作品や、女性社長の姉妹関係をあぶり出す『汝の名』等の明野照葉作品も見過ごせない。異常心理——とりわけ女性心理のそれを鋭くえぐり出した作風は、

嫌な後味を残す今日話題の『イヤミス』にも通じるだろう。

女性作家といえば、ベストセラー『ルームメイト』の他、本格ミステリーを中心に活躍、二〇一三年初めに急逝した今邑彩の作品も充実しているし、ミステリー以外に目を向ければ、荻原規子『西の善き魔女I セラフィールドの少女』のシリーズや、茅田砂胡『デルフィニア戦記 第I部 放浪の戦士I』のシリーズ等、ファンタジー系にも逸材が揃っている。

エンターテインメントの読者も、中公文庫の毎月の新刊からは目が離せない。

かやま・ふみろう コラムニスト、ミステリ評論家。
一九五五年栃木県生まれ。早稲田大学卒業。書評を中心に執筆。「このミステリーがすごい！」大賞選考委員。著書に『日本ミステリー最前線』、編著に『一瞬の人生』『名探偵より愛をこめて』（ともに共編）等。

時代・歴史小説の傑作

末國善己

中央公論新社といえ、社会評論や純文学を中心とするお固い出版社との印象が強いかもしれないが、実は時代・歴史小説との縁も深い。一九二五年の秋、新しい時代・歴史小説を模索する白井喬二らが大衆作家の同人「二十一日会」を結成すると、純文学作家が一斉に反発した。この流れを受け、一九二六年七月号の『中央公論』は、他の雑誌に先駆けて、純文学、大衆文学双方の作家の主張を公平に紹介する特集「大衆文学研究」を掲載。権威ある雑誌に取り上げられたことで大衆文学運動は一気に広がったのである。

時代・歴史小説の歴史に大きな足跡を残しているだけに、中公文庫にも名作が揃っているが、やはり特筆すべきは新選組ものではないだろうか。

子母澤寛『新選組始末記』は、まだ新選組が勤王の志士を暗殺した「逆賊」と見なされていた昭和初期に、新選組を知る古老から証言を集め、新選組復権の流れを作った歴史的な作品で、続編の『新選組遺聞』『新選組物語』も中公文庫に収録されている。新選組ブームの火付け役ともいえる司馬遼太郎の連作集『新選組血風録』は、中央公論社の編集者で、『斬』で直木賞を受賞した作家でもあった綱淵謙錠の勧めで執筆されたもので、やはり中公文庫と関係が深いといえる。無銘の剣が、幕末の様々な動乱に関わっていく森村誠一『人間の剣 幕末維新編』（一〜三）にも、新選組が重要な役割で登場するので、新選組ファンには見逃せない作品となっている。

『婦人公論』を発行し、一九五八年から九七年まで女流新人賞を主催していた中央公論新社は、多くの才能を世に送り出した。一九六二年に『連』で女流新人賞を受賞してデビューした宮尾登美子

もその一人で、一五歳で芸妓娼妓紹介業を営む岩佐に嫁いだ喜和の波瀾の生涯を描く『權』、酒造りの蔵元を継いだ盲目の女性・烈を主人公にした『蔵』など代表作が中公文庫に入っている。そのため、長岡京造営から平安京遷都に至る歴史を、名も無き少年「牛」を軸に描く澤田ふじ子『天の鎖』三部作、正盛、忠盛、清盛へと続く平家の隆盛を海洋貿易という視点でとらえた服部真澄『平家三代』、浅井三姉妹の末妹で、伯父の織田信長の性格を最も受け継いだ小督が、運命に翻弄されながらも戦国乱世を力強く駆け抜けていく諸田玲子『美女いくさ』、大河ドラマ『八重の桜』より早く新島八重に着目していた藤本ひとみ『幕末銃姫伝』など、女性作家の作品も充実している。

ほかにも、南北朝時代の騒乱をハードボイルドタッチで描き、大人気の〈北方三国志〉の原点ともいえる北方謙三『悪党の裔』『道誉なり』、榎本武揚をテクノクラートとして再評価した佐々木譲

『武場伝』、壇ノ浦で入水した安徳天皇が、四つ目の神器・真床追衾に救われていたという奇想で歴史を読み替えていく宇月原晴明『安徳天皇漂海記』とその姉妹編『廢帝綺譚』、天才的な相場師を主人公に、義と利の関係というタイムリーなテーマを描いた富樫倫太郎『堂島物語』など実力派の傑作が揃っている。富樫倫太郎といえば、室町時代の最高学府・足利学校で学び軍配者になった若者が、戦乱をなくし民が飢えない国を作るために奔走する『早雲の軍配者』『信玄の軍配者』『謙信の軍配者』の三部作が、戦国時代と同じく厳しい競争にさらされている若い世代の共感を集めベストセラーになったが、この作品も随時文庫化されるようなので楽しみである。

怪談の古典を、現代人でも恐ろしく、また共感できる物語にアレンジした京極夏彦『嗤う伊右衛門』『覗き小平次』は、博覧強記で怪談好きという意味では京極の大先輩にあたる「岡本綺堂読物

集』シリーズ（一）『三浦老人昔話』、二『青蛙堂鬼談』、三『近代異妖篇』、秋に四が刊行予定）と併せて読むと面白さが倍増するように思える。

最近では文庫書き下ろしの時代小説が人気を集めているが、中公文庫には、没収した財産を売却する**関所物奉行**という珍しくも、不況に苦しむ現代人には身につまされる役職に着目した上田秀人の師匠が殺された事件を追う興津重兵衛が、様々な事件に巻き込まれていく鈴木英治『手習重兵衛』、実在した佐貫藩主・松平重治の清冽な生きざまが印象に残る矢的竜『折り紙大名』などの話題作がラインナップされている。娘が嫁いだ奥州笹野藩に隠居所を構えた元御庭番の鹿間狸齋が、持ち込まれるトラブルを解決していく『御隠居忍法』シリーズを完結させた高橋義夫は、深川で茶漬屋を営みながら喧嘩の仲裁も行っているお蓮を主人公に、新たに文庫書き下ろしの『けんか茶屋

お蓮』をスタートさせており、今後の展開からも目が離せない。

中国ものも、秦の建国に尽力し、国政にも手腕を振るった呂不韋の生涯に迫る宮城谷昌光『奇貨居くべし』、圧倒的な軍事力を誇る元に立ち向かう南宋の人たちを描いた田中芳樹『海嘯』といった読みごたえのある作品が満載。三国志を斬新な解釈で描き、三国志ファンの評価も高い『秘本三国志』、鄭成功を主人公にした海洋冒険小説『鄭成功』、日清戦争をクライマックスにした『江は流れず』などを発表している陳舜臣の作品は、順番に読めばそのまま古代から近代までの中国史が学べるほどである。井上祐美子の『長安異神伝』『桃天記』などは、中国のエンターテインメントといえる武俠（剣戟）、志怪（怪談）小説系の作品なので、重厚な歴史小説とは違ったスリルが満喫できるだろう。

長く純文学と大衆文学を繋いできた伝統のため

か、中公文庫には純文学作家の書いた歴史・時代小説も少なくない。そのことは、中公文庫が創刊時に刊行した一〇冊の中に、安部公房『榎本武揚』が入っていたことから分かるはずだ。昭和初期から大衆文学に理解を示していた谷崎潤一郎は、海鹿馬なる水陸両用の怪獣に乗った海賊が、室町時代の瀬戸内海で暴れ回る『乱菊物語』のほか、美女に化粧をされる生首に興奮を覚える武将の半生を描く『武州公秘話』、浅井三姉妹に仕えた盲目の法師を主人公に触感のエロスを追究した『盲目物語』など、異常性欲を題材にした代表作も揃っている。武田泰淳『十三妹』^{シヤンシヤン}は、清国の名家の第二夫人となった武術の達人・十三妹が、夫のために戦う冒険活劇で、ヘタレ男子と戦闘美少女という最近の漫画やライトノベルでお馴染みの設定を先駆的に採り入れていることにも驚かされる。幕末を生きた忍者が、夏目漱石『坊っちゃん』を思わせる文体で語り手を務める奥泉光『坊っちゃん

忍者幕末見聞録』は、物語が進むにつれ時代、伝奇、SFなど次々とジャンルがミックスしていく奥泉らしい作品になっていた。

このように名作の宝庫になっている中公文庫だが、四〇年の歴史を積み重ねてきただけに、土師清二『砂絵呪縛』、野村胡堂『三万両五十三次』、長谷川伸『相楽総三とその同志』、大佛次郎『四十八人目の男』など品切れも多い。これらを復刊し、歴史的な価値の高い作品にいつでも触れられるようにしておいて欲しいものである。

すえくに・よしみ 文芸評論家、アンソロジースト。一九六八年広島県生まれ。明治大学卒。専修大学大学院博士課程単位取得満期退学。時代小説、探偵小説を中心に評論、復刻活動を行う。著書に『時代小説で読む日本史』『夜の日本史』、共著に『これだけは知っておきたい名作時代小説Best 100』、編著に『山本周五郎探偵小説全集』等。

●中公文庫創刊のころ——第三次文庫ブーム

中公文庫が創刊されたのは一九七三年六月です。その前後に講談社（七二年）、文藝春秋（七四年）、集英社（七六年）と立て続けに各社が文庫を創刊、「第三次文庫ブーム」と呼ばれました。当時の記事によると、「岩波文庫をはじめ、新潮、改造、春陽堂文庫などが創刊された昭和初年が

第一次のブーム。アテネ（弘文堂）、学燈、角川、市民（河出）、創元、三笠、青木、現代教養文庫などが創刊され、一時は九十種あまりの文庫がひしめいた（昭和）二十五、六年が第二次ブーム」とされています（『週刊朝日』七三年七月六日号「ヤングのファッションになった文庫本——第三次文庫合戦の内幕をさぐる」）。

中公文庫の第一回配本のラインナップは、安部公房『榎本武揚』、五木寛之『男だけの世界』、北杜夫『どくとるマンボウ青春記』、司馬遼太郎『豊臣家の人々』、庄司薫『赤頭巾ちゃん気

をつけて』、谷崎潤一郎『潤一郎訳 源氏物語』

（巻二）、ブロンテ『嵐が丘』、魯迅『呐喊』、ニイチエ『ツアラトウストラ』、『老子』。前述の『週刊朝日』の記事は「中公文庫ですか？ 出足は順調ですよ。『老子』がよく出ています」という大阪・紀伊國屋書店梅田店店長のコメントを掲載しています。

この記事によりますと、第三次文庫ブームの特徴は「カラーカバー」としてきます。それまでの文庫は「古典」の意味合いが強く、一色刷りの表紙にハトロン紙をかけた岩波文庫に代表されるようにシンプルなデザインが多く、「奥の方の棚にひっそり、背表紙をそろえて分類番号順にならべられていた」のが、この頃から新参の文庫も旧来の文庫も、競って鮮やかな多色刷りのカバーをかけるようになり、「平台にところせましと山積み」され「新刊書なみの扱い」になったとか。版元も「著者ごとに色やデザイン

ンを統一したら、よく売れる」(新潮)、「坂口安吾の『墮落論』、年に三千部くらいだったのが、カラーカバーをかけたなら、一挙に十萬部売れた」(角川)とほくほく顔。もちろん中公文庫も「売れ行きは予想の倍以上」と、中央公論社書籍編集局次長(当時)の宮脇俊三がコメントしています。

カラーカバーの登場によって、マンガに奪われていた若い読者が戻ってきたという分析もなされています。宮脇俊三は「マンガ大学生が活字へもどっていくようだし、スポーツ紙や週刊誌の代わりに文庫本という人もふえている。この落ち着いた傾向はまだまだ続くと思う」と語っています。

半裸のフィリピン系男性モデルを起用したポスターで話題になった角川書店編集部長(当時)角川春樹(三十一歳)は「安くってハンディな文庫本っていうのは、青春そのもの。若者のフ

ァッションの一部ですよ。だから、化粧品を売るように売って、いっこうかまわないと思う」と胸を張り、取次店の日販弘報課長・宗武朝子は「クルマでも、いまは、装備やアクセサリを自分の好みに合わせて選ぶ時代でしょ。本も、全集の『定食』から、個性や好みで選んで自分の蔵書をつくりあげられる、いわば『一品料理』の文庫本の時代」と分析。記者が「そういえば、このごろ通勤電車の中で、文庫本をひろげている女の子が目立つ」としています。

二十世紀も十年以上を経過した今日、電車で会社員や学生が手にするようになったのは、携帯電話やタブレットなどの『端末』です。電子書籍の普及が、今後、出版文化をどう変えていくのか。そのカギとなるのは、この記事で宮脇俊三が述べているように「信頼を裏切らないものを出版」という原点にあるのかもしれない。

中央公論社が
満を持して発刊する
本格的文庫！

門外不出のベストセラーズを
続々文庫化します。
ご期待ください。



6月10日発売
10点同時発売

中公文庫



中公文庫の40年 メディアをにぎわせた名著
2013年秋号

2013年10月25日発行

中央公論新社

〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7

03-3563-1431 (販売)

03-3563-3692 (編集)

<http://www.chuko.co.jp>

デザイン 鈴木正道 (Suzuki Design)

DTP 嵐下英治

非売品

2013年
秋号



中央公論新社